

松本竣介「都会シリーズ」誕生の契機

山本 恵子（関西大学大学院）

松本竣介(1912-1948)は、堅牢なマチエールと鋭い線描で都会風景の連作「都会シリーズ」(1938-1940)を描き、やがて《立てる像》(1942年 油彩・カンヴァス 神奈川県立近代美術館蔵)に代表される人物画を描いた洋画家である。一方、雑誌『雑記帳』(綜合工房 1936年10月-1937年12月)の刊行や軍部による美術統制に対し「生きてゐる画家」(『みづゑ』春鳥會 1941年4月号)を発表するなど、言葉で社会に対し自らの姿勢を示した。彼の生きた時代は、まさに第二次世界大戦下にあり、残された作品や言葉を検証することは、画家と戦争を考える上で大きな役割を果たすだろう。

近年、その研究は1940年代の作品を中心に造形的視点から進展をみせ、その周辺の時代にも焦点が当てられつつある。しかし、それら研究の多くは画風の変遷によって区分され、詳細な研究が進むにつれてそれに伴う連続性は軽視される傾向にある。竣介の画業において、区分されている作品同士の連続性はそれぞれのモチーフ、筆致や色彩からも顕著であり、これらを検証することによってシリーズ誕生の契機を探ることができると考えられる。また、先行研究による造形性への注目が竣介の言葉を無視し、同時に時代背景からの切り離しという状況を作り出している。幼少期に病によって聴力を失った竣介の場合、意思表示のために文章を書く必要性に迫られており、その多くは絵画作品誕生の契機を考察する上で重要な手がかりとなるだろう。なぜなら、「都会シリーズ」が始まる直前まで刊行された『雑記帳』において、掲載されている彼の文章はより社会的意図を含むようになり、この変化はまさに戦争に向う日本社会を大きく反映しているからである。

そこで本発表では、まずこれまで研究されることの少なかった松本竣介の初期作品に焦点をあてる。「都会シリーズ」誕生までに描いた作品は、彼の画業の中で最も画風の変化が激しく、そこにはまさに形成途上の画家の姿を見ることができる。そして、画風の変遷を連続的に考察した結果、都会風景への関心は従来の《建物》(1935年 油彩・板に貼られた紙 神奈川県立近代美術館蔵)が描かれた1935年頃ではなく、上京直後という極めて初期段階であったと推測される。また、従来の研究で『雑記帳』の刊行に携わる一年半は絵画制作に消極的であったとされてきた。だが、この時期のデッサンからは都会の描写がモチーフとしての“建物”から“都会全体”へと変化し、同時に人物画において構成的要素がみられるのである。よって、これらのデッサンと『雑記帳』によって培われた社会への関心から「都会シリーズ」が誕生したと考察する。

これら一連の考察は、「都会シリーズ」がこれまで指摘されてきたゲオルゲ・グロツス(George Grosz, 1893-1959)、野田英夫(1908-1939)からの対外的な影響からだけでなく、松本竣介という画家自身に内在する初期からの連続性と社会及び時代への関心が契機となっていることを明らかにするものである。